鈴木知太郎校

伊勢物語

（天福本・谷森本）

古典文庫

古典文庫　第六十四冊

昭和二十七年十一月二十日　印刷発行　　非売品

伊勢物語

著者　鈴木知太郎

編集兼発行者　東京都北区西ヶ原町九七七　吉田幸一

印刷者　東京都板橋区板橋三ノ六四　帝都印刷株式会社

発行所　東京都北区西ヶ原町九七七　古典文庫

振替口座東京一四五九七番

凡　例

一、本書には（甲）（乙）二とした。（甲）は定家本系統、天福本の代表として　書寮藏）であり、（乙）廳図書寮藏）であり、（乙）は大島本系統第二類の代表と（宮内廳図書寮藏）である本（宮内廳図書寮藏）である。

一、本書においては（甲）（乙）忠実に活字にうつすことを忠実に活字にうつすことに努めた。したがつて、漢　送仮字等に至るまで、遣、送仮字等に至るまで、すべて底本通りにした。但し通読の便を考へて　適宜句読点、濁点を加へ、会話や消息等にはそれぞれ括弧を施し、また各段の頭には章段の序数を、各歌の下には歌の「通し番号」を附しておいた。なほ為和自筆本に加へられてゐる声点や勘物は、印刷の都合上すべてこれを省いた。また谷森本には「ん」を始め二三古体の仮字が用ゐられてゐるところもあるが、すべて通行の字体に改めた。

一、（甲）種の伊勢物語を收載するに当つては、藤原定家自筆の天福本を、本文は

勿論のこと、その字形、行数、字詰、書入、勘物、声点等に至るまで、悉く忠実正確に臨摹して、今日、同系統本のうちにおいては最善本と考定せられる冷泉為和自筆本を底本とし、またその優秀さにおいて、これと伯仲する善本にして、しかも底本とは兄弟本に当ると思はれる傳定家筆本（三条西家旧藏、現学習院大学藏）、法橋玄津筆本（池田龜鑑博士藏）を以て校合し、その異同については、漢字と仮字、仮字遣、送仮字の差異に至るまで、一々厳密に注記した。しかして、その差異のある場合の注記方法は、底本の当該本文の右傍に＊印をつけ、その本文の下に括弧を施して、その中に差異を存する比校本の相当本文を記すことにした。その場合、比校本の名は略称を用ゐ、三条西家旧藏本は「西本」、池田博士藏本は「玄本」と記した。

一、（甲）種の伊勢物語には、また本文批評の参考にもと考へ、同じく定家自筆本の転写本でありながら、天福本とは異類に属する武田本中の善本たる鈴木重規筆本（愛知県岩瀬文庫藏本）をも校合した。これは専ら本文の差異に重きをお

いて、漢字と仮字との区別、仮字遣、送仮字等の相違は、その注記を割愛した。但し一方が漢字であり、他方が仮字であつて、しかもその意味に相違を及ぼしたり、疑義を生ぜしめたりする危険が予想せられる場合には、一々これを注記した。しかして、その差異のある場合の注記方法は、底本の当該本文の左傍に○印をつけ、その右傍の行間に、○印の本文に相当する岩瀬文庫藏本の本文を、底本の文字より稍々細字に記すこととし、比校本たる同本の名はこれを省略した。

一、(乙)種の伊勢物語を收載するに当つては、大島本系統第二類に属し、この類の中においては比較的欠点の少い善本と思はれる宮内廳図書寮藏、谷森善臣氏旧藏本を底本とし、これに、同類でしかも既に世に知られてゐる神宮文庫藏本を校合し、その差異を嚴密に注記した。但しこれにおいては、漢字と仮字、仮字遣、送仮字等の差異は概ね省略し、それらの差異が意味に相違を及ぼしたり、疑義を生ぜしめたりするおそれのある場合にのみ、その差異を注すること

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にした。しかして、その差異のある場合の注記方法は、底本の当該本文の右傍に○印をつけ、その本文の下に括弧を施して、その中に神宮文庫藏本の相当本文を記すことにした。

一、(乙)種の伊勢物語の底本とした谷森善臣氏旧藏本には、本文の右傍に、本文と同筆と思はれる手で、「本マヽ」と記した所が七箇所あるが、そのうち六箇所(一七・五一・五九・七〇・一二三・一三の各段)は、いづれも本文に疑点あるかに思はれる部分に注せられたものであるから、そのままに印刷して、原形を残すこととした。なほこの本には、「ろうさふのうへのきを(きぬノ「ぬ」脱カ)—四一段・一三五頁」「あるなかなりければ(こあるノ「こ」脱カ)—九四段・一六八頁」「をきふしものをいひて(「の」衍カ)—一二四段・一八二頁」の如き、脱字又は衍字とおぼしきもの、その他、明かに誤写によつて文意を不明ならしめてゐると推察せられるものも若干あるが、今は手を加へることをせず、そのままにしておいた。

一、本書がかやうにして刊行し得られたのは、一に宮内廳図書寮を始め、秘本披

閲の便宜を与へてくださつた三条西家、池田龜鑑博士、並びに岩瀬文庫各位の御厚情の賜である。特に為和自筆本及び谷森善臣氏旧藏本を底本とするに当つては、図書寮監理課長本郷定男氏、並びに伊地知鉄男氏、大窪太朗氏、橋本不美男氏の並々ならぬ御高配を辱うした。記して深謝申上げる次第である。

昭和二十七年十月

鈴木知太郎

（甲）宮内廳圖書寮藏

冷泉爲和自筆本伊勢物語

—三条西家旧藏本・池田亀鑑博士藏本・岩瀬文庫藏本校合—

〔一〕 むかし、おとこ、うゐかうぶりして、ならの京、かすがのさとにしるよしゝて、かりにいにけり。そのさとに、いとなまめいたるをんなはらからすみけり。このおとこかいまみてけり。おもほえずふるさとにいとはしたなくてありければ、こゝちまどひにけり。おとこのきたりけるかりぎぬのすそをきりて、うたをかきてやる。そのおとこ、しのぶずりのかりぎぬをなむきたりける。

かすがのゝわかむらさきのすり衣
しのぶのみだれかぎりしられず　一

となむをいつぎていひやりける。ついでおもしろきことゝもや思けん。

みちのくの忍もぢずりたれゆへに
みだれそめにし我ならなくに　二

といふうたの心ばへなり。むかし人(ナシ)は、かくいちはやきみやびをなんしける。

〔二〕 むかし、おとこ有けり。ならの京はは*(玄本こ)なれ、この京は人の家まださだまらざりける時に、こしの京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なんまさりたりける。ひとり、のみもあらざりけらし。それをかのまめをとこうちものがたらひて、かへりきていかゞ思ひけん、時はやよひのついたち、あめそをぶるにやりける。

おきもせずねもせでよるをあかしては
春の物とてながめくらしつ

〔三〕 むかし、おとこありけり。けさうじける女のもとに、ひじきもと

いふものをやるとて、

思ひあらばむぐらのやどにねもしなん

ひじきものにはそでをしつゝも

二條のきさきの、まだみかどにもつかうまつりたまはで、たゞ人にておはしましける時のこと也。

〔四〕 むかし、ひんがしの五條に、おほきさいの宮おはしましける、にしのたいにすむ人有けり。それをほいにはあらで、心ざしふかゝりけるひと、ゆきとぶらひけるを、む月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころはきけど、人のいきかよふべき所にもあらざりければ、猶うしと思ひつゝなんありける。又のとしのむ月に、むめの花ざかりに、こぞをこひていきて、たちて見、ゐて見ゝれど、こぞにはにるべく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もあらず。うちなきて、あばらなるいたじきに月のかたぶくまでふせりて、こぞを思いでゝよめる。

月やあらぬ春や昔のはるならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほの〳〵とあくるに、なく〳〵かへりにけり。

五

〔五〕 むかし、おとこ有けり。ひんがしの五條わたりに、いとしのびていきけり。みそかなる所なれば、かどよりもえいらで、わらはべのふみあけたるついひぢのくづれよりかよひけり。ひとしげくもあらねど、たびかさなりければ、あるじきゝつけて、そのかよひぢに、夜ごとに人をすへてまもらせければ、いけどもえあはでかへりけり。さてよめる。

ひとしれぬわがゝよひぢのせきもりは

よひ〳〵ごとにうちもねなゝん　六

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじゆるしてけり。

二條のきさきにしのびてまいりけるを、世のきこえありければ、せうとたちのまもらせたまひけるとぞ。

「六」　むかし、おとこありけり。女のえうまじかりけるを、としをへてよばひわたりけるを、からうじてぬすみいでゝ、いとくらきにきけり。あくたがはといふ河をゐていきければ、草のうへにをきたりけるつゆを、「かれはなにぞ。」となんおとこにとひける。ゆくさきおほく、夜もふけにければ、おにある所ともしらで、神さへいとみじうなり、あめもいたうふりければ、あばらなるくらに、女をばおくにをしいれて、おとこ、ゆみ、やなぐひをおひてとぐちにをり。はや夜もあけなんと思つゝゐた

りけるに、おに、はやひとくちにくひてけり。「あなや。」といひけれど、神なるさはぎにえきかざりけり。やう〳〵夜もあけゆくに、見ればゐてこし女もなし。あしずりをしてなけどもかひなし。

しらたまかなにぞと人のとひし時
つゆとこたへてきえなましものを

七

これは、二條のきさきの、いとこの女御の御もとに、つかうまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみておひていでたりけるを、御せうと、ほりかはのおとゞ、たらうくにつねの大納言、まだ下らうにて内へまいりたまふに、いみじうなく人あるをきゝつけて、とゞめてとりかへしたまうてけり。それをかくおにとはいふなりけり。まだいとわかうて、きさきのたゞにおはしける時とや。

〔七〕 むかし、おとこありけり。京にありわびて、あづまにいきけるに、いせ、おはりのあはひのうみづらをゆくに、浪のいとしろくたつを見て、

いとゞしくすぎゆくかたのこひしきに
うら山しくもかへるなみかな

八

となむよめりける。

〔八〕 むかし、おとこ有けり。京やすみうかりけん、あづまの方にゆきてすみ所もとむとて、ともとする人ひとりふたりしてゆきけり。しなのゝくに、あさまのたけにけぶりのたつを見て、

しなのなるあさまのたけにたつ煙
をちこち人の見やはとがめぬ

九

〔九〕 むかし、おとこありけり。そのおとこ、身をえうなき物に思なして、京にはあらじ、あづまの方にすむべきくにもとめにとてゆきけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。みちしれる人もなくて、まどひいきけり。みかはのくに、やつはしといふ所にいたりぬ。そこをやつはしといひけるは、水ゆく河のくもでなれば、はしをやつわたせるによりてなむやつはしといひける。そのさはのほとりの木のかげにおりゐて、かれいひくひけり。そのさはに、かきつばたいとおもしろくさきたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふいつもじをくのかみにすへて、たびの心をよめ。」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば
はるゝきぬるたびをしぞ思

とよめりければ、みな人、かれいひのうへになみだおとしてほとびにけり。

ゆき〳〵て、するがのくにゝいたりぬ。うつの山にいたりて、わがいらむとするみちは、いとくらうほそきに、つたかえではしげり、物心ぼそく、すゞろなるめを見ることゝ思ふに、す行者あひたり。「かゝるみちはいかでかいまする。*（玄本ナシ）」といふを見れば、見しひとなりけり。京に、その人の御もとにとて、ふみかきてつく。

するがなるうつの山べのうつゝにも
ゆめにも人にあはぬなりけり

二

ふじの山を見れば、さ月のつごもりに、雪いとしろうふれり。

時しらぬ山はふじのねいつとてか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com